

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 4 月 9 日現在

機関番号：12611

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2023

課題番号：21K19980

研究課題名（和文）戦時下の「日本科学」表象と文学者の言論活動をめぐる総合的研究

研究課題名（英文）A Comprehensive Study of Wartime Representations of "Japanese Science" and the Discourse Activities of Literary Scholars

研究代表者

加藤 夢三 (Kato, Yumezo)

お茶の水女子大学・基幹研究院・助教

研究者番号：90906207

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,100,000円

研究成果の概要（和文）：戦時下において「日本科学」という概念が、広く文学者たちの言論活動に影響を与えていたことを明らかにした。具体的には、横光利一『旅愁』や『微笑』など、後期の小説作品について、普遍的なものと特殊なものとの相克という主題が見いだされ、その主題が「日本科学」をめぐる同時代言説と密接に関わっていることを示した。

「日本科学」は、戦中から戦後にかけて持続的に討議された知のあり方であり、文学者たちも巻き込んで多くの討議が交わされていたが、その文化的な広がりを検討することは、断絶が指摘されがちな戦中と戦後の思想的連関を、より立体的に捉え直す景気となると結論づけた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、戦時下における文学者たちの言論活動を、さまざまな同時代の思想的文脈に定位しなおそうとするものであり、各々の内面的な作品分析を、より学際的な研究領域へと繋いでいくだけの意義を持つものである。特に、横光利一の後期小説については、従来単なるファナティックな情念が先行しており思弁性が過ぎるものだと指摘されていたが、その方法意識が、共時的な背景を持つものであったことを明らかにすることで、より解釈の枠組みを拡げていくことに成功した。

研究成果の概要（英文）：The paper reveals that the concept of "Japanese science" widely influenced the speech activities of literary scholars during the wartime period. Specifically, we showed that the theme of the conflict between the universal and the particular was found in Yokomitsu Riichi's novels of the latter half of the war, such as "Tabi-shoso" and "Sansho", and that this theme was closely related to the contemporary discourse on "Japanese science".

The study concluded that examining the cultural expansion of "Japanese science," which was the subject of sustained discussion during and after the war and was the subject of numerous debates involving literary scholars, would provide an opportunity to reconsider the linkage of ideas during and after the war, which is often pointed out as being disconnected, in a more pluralistic way.

研究分野：日本近代文学

キーワード：日本科学 横光利一 中河與一 戸坂潤 海野十三

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

従来、戦時下の日本における思想動向は、西欧の科学主義/日本の精神主義、あるいは非合理的な判断を下す政治体制/合理的思考を有する良識派知識人という図式で語られがちであった。しかし、実際には戦時下の統治権力は、確かに西欧的な思考の方法との差異を主張しながらも、なお西欧とは異なる仕方では合理主義・科学主義の立場を取っており、そのキータームとなるのが「日本科学」という表象概念であった。その思想的な射程と文学者の言論活動の影響関係を整理することが必要であると思ひ至り、本研究課題を設定した。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、戦時下の文学活動に関わる諸々の社会的文脈を検討する作業を通じて、文学者を含めた一部の人文系知識人をファシズムへと向かわせた思想的要因を、より多角的に再検討することにある。戦時下の「日本科学」をめぐる言説は、人文系・理科系を問わず知識人たちによって広く議論されており、それは統治権力が軍事利用できるような科学技術を重視し、行政の内側で科学者・技術者に特別な役割を与えはじめたことと相即している。理科系と人文系の学知のせめぎ合う場として、まさに「日本科学」という表象概念はせり出してきたのであり、その分析と考察のために、科学史と文学史の学際的な越境を導くような論理の構築と、多様な言説ジャンルに跨った粘り強い量的調査を目指した。

### 3. 研究の方法

本研究で考察の対象となる範囲は、横光利一や中河與一といった新感覚派に属する書き手たちの表現営為はもちろん、海野十三など大衆的な「科学小説」「軍事小説」の作家たちによる、戦意高揚を促す作品様式のあり方も含まれる。さらには、戦時下の自然科学者たちによる論壇進出の動きを並行的に把握していくことも目指した。

本研究においては、何よりも同時代資料の収集ならびに言説分析が主たるアプローチとなるが、具体的な研究内容については、以下の3つに区分して考えた。

[ ] まずは、同時代において「日本科学」という語句が用いられた言説の類を抽出し、そこで大まかに共有されていた思想的課題を探る。

[ ] 同時代の「日本科学」という表象概念をめぐる文化資料(文芸雑誌・総合雑誌・新聞・雑書など)をアーカイブとして体系化し、その思想的な広がりを策定する。

[ ] [ ] で明らかとなった「日本科学」をめぐる言論状況について、文学者を中心とした知的ネットワークの総体を描き出し、具体的な小説・詩歌作品との関連を考察する。以上を複数の学術論文にまとめ上げることで本研究を達成する。

### 4. 研究成果

本研究の成果は、下記のように要約できる。

・横光利一や中河與一の文学活動には、「日本科学」という表象概念と密接に関わるものが散見され、彼らが同時代の思想的課題を各々の仕方で作中に取り込もうとしていたことを明らかにした。

・戸坂潤は、共時的な科学者の社会進出をめぐる動きを睨みつつ言論活動を展開したが、科学者が「日本科学」という統治権力のスローガンに取り込まれていく事態に警鐘を鳴らしていたことを明らかにした。

・戦時下の海野十三が発表していた「軍事小説」には、同時代の「発明報国」に関わる思惑が照射されているが、その背景にも「日本科学」の問題系が介在していることを明らかにした。

具体的な発表論文は次の通りである(いずれも単著・査読あり)。書誌情報を示し、その後で要約を付しておく。

(1) 「物質」の境域 初期中河與一と衛生理念 『昭和文学研究』第84集, p.21-35, 2022.3

本論では、新感覚派の中心的な旗手の1人であった中河與一の表現活動について、特に初期の論説や創作営為に示された衛生(衛生学)に関わる主題を検討した。周知のように、1918年から翌19年にかけて、いわゆる「スペイン風邪」(H1N1亜型インフルエンザ)が世界的な猛威を振るっていたが、それは人びとに感染症への恐怖をもたらし、ゆえに政府は各人の身体を“清潔”に保つことを強く奨励していった。自身も重篤な潔癖症に悩まされていた中河は、こうした時勢に青年期を過ごしており、その経験は初期作品において、滅菌というモチーフを通じて顕現していくことになる。そこには、同時代のマルクス主義思潮に支えられた「唯物論」とは異なる意味での、厳格に統制された客体としての身体観が照射されていることを明らかにした。従来、中河の作風はあまりに神経質であり、重厚な「人生」の思索を描けていないという批判があったが、上のような文脈を踏まえてみれば、そこには物質依存/物神崇拜の機制をめぐる新たな批評的意義を読み取ることができる。それは、後年まで続く観念への行路を導き出すと同時に、新感覚派の試みを文体や技巧の次元だけでなく、より思想的な水準から再考する契機ともなるのだ

うと思われる。

(2) 「1930年代日本における科学者の論壇進出と戸坂潤の「文藝学」構想」『科学史研究』第303集,p.199-214,2022.10

本論では、1930年代において大きく変容した科学ジャーリズムのあり方と、左派系の批評家として知られる戸坂潤の言論活動を検討した。この時期、それまで専門知の探究に力を注いでいた職業科学者たちが、同時代論壇への参入を通じて社会参画の意思を志すようになった。この動きは、高尚な人格と洞察能力を持つ総合的知識人としての科学者像を確立する一方で、結果的に科学振興を目論む統治権力に迎合する側面も含み持っている。1930年代における戸坂の批評営為は、こうした職業科学者と統治権力の協働関係に向けられたものとして理解することができる。職業科学者による公共意識の高まりが批判精神を欠いたまま帝国日本への国策貢献と接続してしまう事態に対して、戸坂は幾度も警鐘を鳴らしていた。このような協同関係を回避するためには、公共的な価値理念とは異なる個別具体的な視点を持つことが重要であり、ゆえに巷間の職業科学者には「文学」に携わることが積極的に奨励されていく。戸坂は、こうした「文学」の解釈や吟味を通じて認識論的な思索を深める企てを「文藝学」と呼び、そこに時局の改治力学とは異なる知的対話の契機を探ろうとしていたことを明らかにした。

(3) 「帝国の論理 / 論理の帝国 横光利一『旅愁』と「日本科学」」『日本近代文学』第108集,p.46-61,2023.5

本論では、戦時下に書き継がれた横光の長篇小説『旅愁』（『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』1937.4.14夕刊～『人間』1946.4）について、ちょうど連載の狭間となる1941年あたりを中心に興隆していた「日本科学」をめぐる言論動向との関連を検討する。「日本科学」とは、帝国日本に独自の「知」のあり方をめぐって、当時の言説空間で盛んに討究された表象概念であり、それは横光自身の問題意識と深く結びつくものであった。主に1930年代に発表された『旅愁』第1・2篇では、「知性の民族性」の有無をめぐる認識論的な葛藤が描かれていたが、1942年に再開された第3篇以降では、西欧近代とは異なる「論理」の所在が検討されたうえで、前述の葛藤に強引かつ独善的な解決が与えられる。そこには、1941年5月に確立した科学技術新体制を基軸とする「日本科学」論の興隆が関わっており、その思想的変転は、同時代の座談会「近代の超克」（『文学界』1942.9～10）に見いだされる特有の話法とも共振するものであることを明らかにした。

(4) 「発明のエチカ 海野十三の探偵 / 科学 / 軍事小説」『昭和文学研究』第88集,p.147-162,2024.3

本論では、日本SFの始祖として名を挙げられる海野十三の文筆活動を検討した。海野は、探偵小説の書き手として自身のキャリアを確立させたが、1935年前後を境として「科学小説」という新興の文芸ジャンルを創設することに意欲的な姿勢を見せていく。そこには、分かりやすく珍妙な科学的装置の「発明」を作中に描くことで、高尚な「謎解き」とは異なる講談のような興味をもたらそうという独自の方略が認められる。海野は、それを探偵小説の「低級化」と呼び表わし、むしろ「発明」の新奇さによって読み手の興味・関心を惹起するような記述営為を積極的に肯定していたが、そのような作意のあり方は、戦時下において「発明」という営みが政治的有用性と結びつくなかで、次第に「軍事小説」の物語文法へと近接していくことにもなる。それは、単なる体制翼賛的な政治イデオロギーへの迎合というばかりでもなく、複数の文芸ジャンルを越境する過程で、海野が「発明」の政治的有用性をめぐる同時代の言論動向に絡め取られていったことの帰結とも捉えられることを明らかにした。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 加藤夢三	4. 巻 108
2. 論文標題 「帝国の論理 / 論理の帝国 横光利一『旅愁』と「日本科学」」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『日本近代文学』	6. 最初と最後の頁 46 61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤夢三	4. 巻 303
2. 論文標題 1930年代日本における科学者の論壇進出と戸坂潤の「文藝学」構想	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『科学史研究』	6. 最初と最後の頁 199-214
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤夢三	4. 巻 88
2. 論文標題 発明のエチカ 海野十三の探偵 / 科学 / 軍事小説	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 『昭和文学研究』	6. 最初と最後の頁 147-162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤夢三	4. 巻 84
2. 論文標題 「物質」の境域 初期中河與一と衛生理念	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『昭和文学研究』	6. 最初と最後の頁 21-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 加藤夢三
2. 発表標題 「帝国の論理 / 論理の帝国——横光利一『旅愁』と「日本科学」」
3. 学会等名 日本近代文学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 加藤夢三
2. 発表標題 テクノクラートたちの戦後——『微笑』の倫理
3. 学会等名 横光利一文学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------